

英国における大学セツルメント運動の立役者、 チャノン・バーネット (その2)

山 口 信 治

〔抄 録〕

19世紀末英国に開花したトインビーホール (Toynbee Hall; The Mother of Settlement), いつ誰によってどのような展開したのか点と点を結んでみたい。2つはトインビーホールの創始者, 初代の館長, さらにトインビーホールを語る場合のキーパーソン, チャノン・バーネット (Samuel Barnett, 1844–1913) の人柄について1884–1913の館長時代に焦点をあてる。3つは素朴な疑問だが, 彼のダイナミックな活動の反面“ヒポコンデリア”⁽¹⁾というハンディ (過度に健康を心配する気質) をもっていた。少年期これに悩み“ひきこもり”と“登校拒否”の時期を過ごしている。その彼がセツルメントを立ち上げそれを展開させる場合支障とならなかったのだろうか, いわずもがなコネ (connection) や資金集め支援団体に関係が欠かせないがそんな疑問が残る。4つはくわえて彼の招聘に応じて寝起きを共にしたレジデント (resident) にとって彼の人格的影響 (human influence) は決して少なくはなかっただろう。そして最後にトインビーホールの社会組織“住”組織^{(2), (3)}についても触れることにする。

キーワード トインビーホール, 大学拡充運動, サムエル・オウガスト・バーネット

1. いつ誰によって何が

今から120年前“セツルメントの母”東ロンドンに大学セツルメントがオープンした。

1884年12月末, 正式には翌1885年1月10日, バーネットを初代館長とし14人の若い青年レジデントらによってテープが切って落された。では“どこ”にその根をおろしたのだろうか。くわしくは拙者の「ルート Stebb's Hyth (“landing place” 旅立ちの地)」を参照。

少しキーパーソンのバーネットのいくつかの“新しいエボック”について記しておく。まずオックスフォードのワドハムを卒業, ウンチェスター (大学院) で法学を修める。そして1867年, W・H・フレメントル (William H. Fremantle, 1831–1916) の招聘を請けてセント・メ

英国における大学セツルメント運動の立役者、チャノン・バーネット（その2）（山口信治）

アリ教会に牧師補として赴任してくる。ここで特記すべき人との邂逅があった。1人はフレメントルとの出会いであろう。彼は宗教と社会の関係を結合させて労働者クラスの生活を改善させる“社会理想主義”の道を開発していた人物、2人目は住宅の改善事業をしていた刺激的かつ実践家オクタビア・ヒル女史（**Octavia Hill, 1838–1912**）と、彼女の友人たち **H・O・ローランド**、**ビトライス・ポーター**そして**エドワード・デニソン**とくにその指導者 **J・ラスキン**（**John Ruskin, 1819–1900**）との出会いであろう。その後のセツルメントに欠かせない人物となったからである。またその後エボックは**1867**年セツルメントの舞台になったホワイトチャペルのセント・ユダ教会に牧師として“東ロンドン最悪の貧乏の地”に赴き精力的に教会の改革を進めた。まず教会の活性化を図るため日曜礼拝の復活、コンサートや絵画会の開催など、さらにこれまで関わってきた **COS** の活動や大学拡充運動の拠点づくりに積極的に住民と関った。ついに**1884**年記念すべきトインビーホールを立ち上げ初代の館長になった。

場所はコマーシャル通り **28** 番地（ロンドン・**E 1**）。当時ホワイトチャペル（**Whitechapel**）に属していたが後にステップニー・バラ郡（**Stepney Borough**=自治区）に、ここはロンドンの副都心しかも市内からのアクセスのいいステップニーの北の角に位置した。北はイーストエンドのベスナルグリーン（**Bethnal Green**）と、南はテムズ河とキャサリンドックそしてバンクに通じ徒歩で **15** 分、また **1906** 年に地下鉄（デストラクトライン）が開通しその最寄りの駅から **5** 分という近さにある。ところでこの大学セツルメントのアイディアは運動の創始者バーネットのスタンディングポイントの“罪の意識”という一風かわった“旅立ちの地”の舞台でもある。

2. 神に見放された東ロンドン

当時のこの町は“神から見放された地”であり“悪い熱病の多発地”⁽⁴⁾おまけに“東ロンドン最悪の極貧地区”⁽⁵⁾とまでいわれ一種の偏見に満ちた地域でもあった。過去いくつかのインバイダーが出没する。最初のそれはナウマン象とそれを狩猟する人類のあけぼの（**nomadic**）たちだ。その後 **BC 400** 年には第二のインバイダー、ローマ帝国がここを支配する。都市国家ロンデウムを築きチェセスターからベスナルグリーンを経てボウに至る石畳のハイウェイ（ロマン街道）を整備させた。続いてサクソン人たちがそれにとって代わって登場しキリスト教の布教の中心地に変えた。彼らは多くの修道院や施与所それに病院（**London Hospital**）⁽⁶⁾やリトリート（保養所）を作って住み、**1250** 年ごろまでには独立した自治体を形成した。しかし最後のそれは産業革命期を折に出没したもので、早くは **1840** 年代ヨーロッパを襲った大飢饉により脱出してきたアイルランド難民⁽⁷⁾、ナポレオン戦争で人員不足を補うため中国人やインド人たち、それに数多くのユダヤ人と商人たち、宗教迫害のため移住を余儀なくされたユグノー、化学工業の担い手たち、旅行者、物流センターで物を売買する人、それに急激にベット

ターン化し安宿を求めて集まった労働者たち、加えてエンクロジャによる周辺の貧しい農民たちなど、いずれも自由や市民権を持たない雑多なインベイダーたちで町は膨れ上がった。

次に人口センサスから人口とその構成をみよう。とくに1881年から1905年の間急激な人口増をみた地域である。当時(1881年)人口が9千6百人から1901年には2万9千人と、これがまたこの地域のカラーを作り出していった。しかも最大のカラーは国外者で占められていたこと。19世紀はじめには中国やインドから、フランスからユグノーたち。そして最大の人種はユダヤ人であった。1884から1905年にかけて凡そ100万人が東ヨーロッパから難民として離散⁽⁸⁾してきた。うち28万7千人余りが英国に、そして約半数の13万5千人余りがロンドンに、そして東ロンドンに5万4千人余人⁽⁹⁾が当地ステプニー郡に移り住み大きなユダヤ人コミュニティを形成させていった。ついに1901年には全人口の37パーセントにまで膨れ上がりトインビーホールの周囲がこの大きなユダヤ人コミュニティの只中にあった⁽¹⁰⁾。

もう1つこの町“旅立ちの地”は19世紀ロンドンの東西の橋渡しをしたいわゆる“隣人”(good neighbour)たちが活躍した舞台でもある。トインビーホール創始者たちの抱いた初期の試みは、外国人(ユダヤ人)をはじめとする人々の偏見(anti-alien hysteria)を取り除くことにあった。次に不衛生や不良住宅の改善や解消、そしてこの町最大の社会問題(social question)犯罪と非行の多発地など頭の痛い問題を山積していた。手始めにユダヤ人対策は戸籍を作ること、そして犯罪防止はセトルメントの人間の資源であるレジデントたちの友情⁽¹¹⁾(to be good friend)によって解決しようと情熱を燃やした。

19世紀すでにここには多くの教会関係者(アングル・カトリック教会)はじめキリスト者、社会主義者(ウィリアム・ブーツ)、研究者(カーライル)、著述家(ディッケンズ、リード、デイスラエリ、M・ビザント、ヘンリー・メイヒュ)や社会調査家(C・ブーツ)、歴史研究者(グリーン)やジャーナリスト(A・ミーンズ)それに社会改良家(チャドウィックやシャフチベリ、それにオスラー)、旅行家などが訪れ案内書を手がけている。その古い地図にトインビーホールが明記されている。ホワイ特チャペルの聖ユダ教会から数ヤード南へ下がったところにこの館があった。四方から見えるこの変わった建物(ブロック建ての大きな建築物、一部はイーストエンド会社とハウジング協会の助成)が大学セトルメント運動のシンボルとなった。

3. 館内案内

コマーシャル通りより館にはいると、まず館長の部屋の下にあるアーチ型のトンネルこれを潜り抜けると前方に素敵な建物が目にはいる。古いオックスフォードの建築を模し、建物が1階部分には講義室と食堂とそれに客間が、そして2階がレジデントらの居室に当てられている。裏庭には何面かのテニスコートが閑静な“住”の共同体の拠点となった。

英国における大学セツルメント運動の立役者、チャノン・バーネット（その2）（山口信治）

そこで幾つか館の印象を拾い出してみよう、1つはメイン会場の講義室で1885年当時のオックスブレッジのカレッジルームを模したもの⁽¹²⁾だが、その印象をレジデントの1人が両親に書き送っている「多少の狭さはいなめないが、ラセン状の階段など学生時代のカレッジライフをしのぶに十分だ」⁽¹³⁾と。2つは1894年もう1つの館（ユニバーシティ・カレッジ）という建物を加えビバリッジの仲間たちが時計を取り付けた。まさにセツルメントの働きを（leisure）を表徴するかのように“荒廃した地域から1つの望み”⁽¹⁴⁾を演じて見せてくれた。レジデントたちも“都市の中の美のオアシス”⁽¹⁵⁾と呼んで人々の心の憩いや癒しのシンボルにふさわしいと自負した。なかには自分の部屋からみた景色をスケッチして友人に送り、立ち並ぶ工場の煙突から立ち上る煙が“いいようのない（公害の）さびしさ”⁽¹⁶⁾を物語っていると。また他の住人はここが街中の騒音や人ごみと打って変わって、一步館に入るといいようのない静寂さに大満足して両親に興奮ぎみの手紙を書き送った「建物とそのなかにある中庭はオックスブレッジの田舎を思わせるような静けさとそのたたずまいは神との交わりや瞑想の場にふさわしい」。その他庭についていくつか記録が残っている。その定期雑誌⁽¹⁷⁾にそれが取り上げられ「周囲の環境から別天地トインビーホール」と題した記事になってシンボルそのものだと紹介している。「“オアシス”と呼んでこよなく愛された」ことが詳細に記録されている。また建物のあちこちにつくられた花壇について四季おりおり植え込まれた草花が、これまた「こころ和むオアシスにふさわしい」などなどコーディネイトの良さを絶賛している。まさにバーネットの演出通りの見事なトインビーホールの様子がわかる。

またほかのレジデントの中には、長くバーネットと交友した友人などは「ぼくを引きずり込んだホワイトチャペルの生活は“社会サービスの必要にこたえよ”と言った“先生”（バーネット）の意図がよく理解できる」⁽¹⁸⁾と。また反面バーネットの招請に応じてここにやってきたもののショックを抑えられない気持ちを母親にあてた手紙が残っている。はじめにトインビーホールでの日常生活についてふれ、後半に周囲に住んでいる貧しい人々の生活についてふれている。「2人の親と3人のこどもたちが（1世帯5人）が狭い一部屋に住んでいるんだ」とか、「子豚と一緒に同居している」こと、その上、町の様子について「気持ちわるい病気（熱病の流行）が蔓延している」⁽¹⁹⁾所だと興奮気味に書き送っている。

また訪問者のなかにも、G・K・チェスタートン（G. K. Chesterton）なども、訪問を終えて「中産クラスが持ち続けてきた考えに誤解や失態があった」と正直に告白をしている。現に1つの階級だけが存在してきたと。このクラスの者は“他の者”（他の階級者など）のニーズなど考えてもみなかった。また“つかえたり奉仕する者”などとてもないことだと。もちろんそんなこと今日の社会では“もっとも低俗な仕事”といわれるだろう、そんな“やさしい友人”など過去の異物でしかない、がしかし今後これは「厄介だが沈黙と頭痛の種となるのだろう」と。

さらにビトライズ・ウエップ（B. Webb）ですら、彼女が労働者たちの実際の生活を調査す

るまでは「労働者はただの抽象的な（もの＝数字）でしか考えられなかった」と、それに「人間の存在にとってだた統計上のマス（mass）でしかなかった」⁽²⁰⁾と自戒も込めて書きとめている。彼らにとって働くということは「自分の子供をつくる“コピー”の繰り返し」でしかなかったとさえ述べその理解のなさを自戒している。

もちろん1880年代の唯一社会理論をもっていた社会主義者W・モーリス（William Morris）でさえ「1884年代労働者の家庭に入ったことはなかった」とあり、トインビーホールが開設した後はじめてイーストエンドの労働者たちを訪ね彼らと交流した。1885年彼が“ステップニーでのある会合”で「思ったことを彼らに話すことすらできなかった」し、むしろ「引け目さえ感じた」と。くわえて自分と彼らとの間にある溝や垣根のあることを痛感していた⁽²¹⁾。

4. トインビーホールの組織

大学セツルメントの名称をトインビーホールと呼んだ。これはミセス・バーネットの発案で館の開所を待たずに死んだ友人アーノルド・トインビーを記念して付けた名で、正式には“東ロンドンの大学セツルメント”と呼ぶ。若干この組織は他の社会組織といささか様相を異にしていた。端的に言ってこの組織は“a living organism”（ピピト命名）つまり“住まいの共同体組織”といっていだろう。大学セツルメントの担い手たちレジデントたちの“住”共同体がこの特徴をなしていた。

この住まいの共同体の組織はヘッド⁽²²⁾に審議決定機関（トインビーホール評議会）⁽²³⁾と、その下にセツルメント活動を統括する館長（Warden）とレジデント（Resident）からなる集団を置いた。この下にプログラムを具体化する専門の委員会（大学拡大講義、夜学校の講義など“popular education”の準備）と館の運営に当たる管理課や住人課や経理課を置いた。そのほか評議会とレジデントからなるロンドンカンテイ評議会ははじめ、レジデントを中心に種々の活動協議会を結成して備えた。

ところでこの共同体へのメンバーシップ⁽²⁴⁾は若干の費用（5年契約で2.10ポンド、ただし1年契約の場合は年間10シリング）と評議会の承認を要した。まず3ヶ月間“訪問者”として見習い期間があり一定の訓練を受ける。その後館長やレジデントらの推薦を得て評議会の正式な承認上をうけてはじめてレジデントとなり、さまざまなセツルメント活動（主に教育プログラム⁽²⁵⁾）の役割を担うことになる。

次に共同体組織の運営とくに具体的に諸経費について述べる。開設当初（1884年）から1911年まで、のべ188人⁽²⁶⁾のレジデントが参加して120余りの各種協議会の仕事をこなした。これに要した金額は年間2650ポンドの経費を要した。また支出内訳をみると1800ポンドがサラリーと館のメンテナンスや活動費に、つぎに大きな出費は講義費やクラス費補助など講師費

英国における大学セツルメント運動の立役者、チャノン・バーネット（その2）（山口信治）

用やメンズクラブで合わせて 600 ポンド、そして 250 ポンドが館長のサラリーとなっている。そうして館の運営が独立採算制で任されているため台所は決して余裕のある財政ではなかった。その主な収入源はレジデントらの貸室料、諸クラスの受講料からの収入、それにトインビーホール評議委員会ははじめ USA 協会（Universities Settlement Association）その他の各種団体からの寄付とあるが、なかでも両大学なканずくバリリオール大学（オックスフォード）からの経済的な支援は大きかった。

5. スタンディングポイントとしての“罪の意識”⁽²⁷⁾

まず“住の共同体”という発想は、1868 年 J・ラスキン（John Ruskin）がデニソン、ランバート、J・R グリーン（J. R. Green）を集め 1 つの会合を持ったそれに源流を求めることができる。「一人一人がこの地に入植する者のコロニーによって貧民の問題にあたろう」（a colony of members of the Upper classes, “place a living intercourse”）という提案が出され、その実現にむけて「ラスキンの仲間たちによって論議され」彼らがそれに応じた。この様子をブルク・ランバートは「コンテンポラリーレビュー」（1884, 9 月号）⁽²⁸⁾に載せた。また「彼らデニソンとグリーンらがそれを支持しその設立にむけて準備した」と記され、これがロンドンでの初の一投となったことは間違いない。

つぎにセツルメントのアイディアの 1 つ、“教育の導入”⁽²⁹⁾は 1823 年ラスキン大学としてロンドン労働者講習場が、1854 年にはモリスらの労働者大学、また 1856 年にはドックの近くにチャルス・ロダーによるミッションが、さらに 1875 年に支援活動を具体化する大学拡充ロンドン協会を組織し大学拡充運動（University Extension）を展開させた。やがて 80 年代にはいるとオックスフォード・ハウス（東ロンドンのベタナルグリーン）を皮切りに女性大学セツルメント、マンズフィールド・ハウス、大学ホール、ニューマン・ハウスなどと目白押し 19 ヶ所⁽³⁰⁾がオープンし、まさに百花繚乱の観を見せるに至った。

もちろんこのアイディアの原流はジェームス・ステアートの Social Idealism の運動⁽³¹⁾と大学拡充運動に、またオックスフォード運動があげられる。総じてこれには 2 つの特徴がある。1 つは宗教上の覚醒運動であり、もう 1 つは社会問題に関する研究会の動きである。とくに後者のそれが大学拡充運動を大きくコミットしたことは事実である。なかでもそのオピニオンリーダーはバリリオール大学（オックスフォード大のチューター）のアーノルド・トインビー（A. Toynbee, 1852–1883）であり、その貧困研究を無視できない。すでに教会改革をカーライルやマウリス、それにキングスレイといった貧困研究の成果やその原因、問題解決などの見識を受け入れ、ユニークな解決策として“positivism⁽³²⁾や Comtism⁽³³⁾” また“ideals of humanity⁽³⁴⁾”を導入させ、そのフィールドワークとして熱心なオックスフォード大の学生や卒業生たちを組織して労働者を対象にした大学セツルメントを試みた。この動きはその後の大

学拡充運動の勢いをいっそう加速させることになった。

6. セツルメント構想の発表

バーネット夫人やその友人ホーランドらの勧めでバーネットはオックスフォード大学を訪問することを決意した。トインビーホール開所3年前のことである。バーネットはこの訪問を非常に喜んでいただようだ。正式には84年1月のセント・ジョン大学を訪問した際はじめて聴衆を前にして大学セツルメント構想を披瀝した。

まずこの計画のアウトラインを述べ、この地域(東ロンドン)に来てこれから始めようとしている大学セツルメント事業の担い手(レジデント)として“社会サービス”の担い手として献身してほしいと呼びかけた。その熱心なアピールは次のようだった。「ここ(東ロンドン)に来てこの人々と一緒に暮らしてみしてほしい。ボクは君たちが持っている友情(かかわりの実)と喜びに期待している。ぜひそれらを労働者クラスの者にわけてやってほしい、何を彼らが考えているのか何を欲しているのかそれが知りたいのだ⁽³⁵⁾」と。

引き続き仕事について触れた。これまでのミッション(司祭や牧師としての救霊活動)ではなく、“新しいミッション”つまり貧困地区での教育や医療、各種行政の専門官として、さらに大きな挑戦として慈善施設でのソーシャルワーカーやCOS協会や生活共同組合などの協会の働き人に、労働者団体の立ち上げや労働者クラブの教師として門戸が開かれていることを示した。

そしてその担い手であるレジデントが必要だと熱弁をふるった。レジデントとしての仕事はまず彼らが館に住込んで周りの労働者クラスの者と一緒に暮らすこと、労働者クラスの人々に彼らのもっている“leisure”(物心両面の豊かさ)を指し示すこと、これが問題解決の処方箋であり、この担い手たちの示す“友情”こそが大きく期待されていることを力説した。しかもこの直接的な人間との関係(接触)を通じてかれらの生活や意識を変えようとするもので、これが後の大学セツルメントの特別なミッション(霊的高揚)を実現するものだとし繰り返し繰り返し述べた。彼の説いたセツルメントを要約すると基本的に3つの必要⁽³⁶⁾に応えること。1つは科学的な調査の必要、2つは教育による改善の必要、そして3つがリーダーシップの必要でありそれに応えることだ。

こうしたアピールを下支えたのが、その同じ年(1883年)ロンドン市民を震撼させたA・ミーンズ氏(Andrew. Mearns, 英国国教会牧師)の『Pall Mall Gazette』俗に言う“『1ペニー・パンフレット』”(『The Bitter Cry of Outcast London』)の出版物と無縁ではなかった貧困問題である。彼はこれを“東ロンドンの貧困の黙示”⁽³⁷⁾と位置付け、貧困の正しい解釈とその社会的解決の必要を痛感していた。大学セツルメント構想を具体化させるにあたり、是非とも友情という資源によって貧民の労働者クラスの実態を知りかつその真の解決策はかれら

英国における大学セツルメント運動の立役者、チャノン・バーネット（その2）（山口信治）

の意識や文化を知ること、そうした問題解決の知識（実証知）を得ることなど、そうした実証主義（positivism）によって問題を解決しようとした社会科学の導入の必要が見られる。

彼がこだわった「ここに来てみよ」⁽³⁸⁾というバーネットの招きは、現実の貧困を伝えたジャーナリストらの提供する知識があまりにも誇張した貧困であって感傷的なそれであったことを非難している。むしろすぐれて“国家の危機”という貧困観と人間の成長を阻む貧困問題にメスを入れようとしたものであり、前者のそれには法律や制度による富の分配、そして後者のそれは最低生活の保障、雇用の義務、社会環境の整備はもちろん貧困がゆえに教育を受ける機会を失った者にあたえられる教育機会の拡大にある点を力説した。

7. 推進委員会の立ち上げ

推進委員会の任にバーネットが選出され具体的な内容を検討した。まず館の候補地や建築、それに最大の課題だったレジデントらの選出など意見が交わされた。そのすぐ後ケンブリッジでの会合で寄付行為や館のメンテナンス、それに館長の役割と給与（250 ポンド）が議論され一定の成案をみた。くわえてレジデントらの特殊な教育と訓練についても協議がなされ⁽³⁹⁾、その1ヶ月後にはこの場所に敷地を求めた。

その年の5月、バーネットはその共労者キング（B. King）らとケンブリッジで1つの集まりをもちより具体的かつ詳細な計画を立てることだった⁽⁴⁰⁾。その10日後、P・ゲル（Plythton Gell）がオックスフォード大学に呼びかけその支援法について連携の必要を説きその強化を要請した。こうして両大学に強力な推進母体ができ着々と開所にむけて準備が進められた。ついに1884年の12月の末記念すべき館のオープンを迎えることになった。

そこでバーネットの両大学での報告会の様子について2, 3拾ってみる。事実バーネット本人もこれを楽しみにしていた両大学での定期集会（報告講演会）だが、あるときは600から700人もの聴衆者が集まった⁽⁴¹⁾と。まさに盛大であったことがわかる。多少の混乱とクレームがあったのは否めないが、出席者には大学教授や学生たちはもちろんそのほか政治家や社会事業家、社会改良家、それに多くの地域のリーダーたちが集まった。彼らは「熱心にバーネットの話に耳を傾けた」とありその関心の度合いの高さを物語っている。話の内容はトインビーホールの現状と将来の展開についてだが実に熱心に訴えた。その後この集会が「徐々に集まりが減ってはきた」ものの、つねに200人を超す参加者がいたことが記録に残されている。とくに印象深いのは1908年の2月、オックスフォードの聖ユダ大学で開催された集会だろう。「会衆にはほぼ満員」とあり、またこの集会にはトインビーホールの支援者であるE・スミス（E. Smith）やコイルド（E. Caird）マービー（Marbby）やホルベス（Forbes）、バル（S. Ball）などが名を連ね集会を準備している。特にバルはT・グリーン教授やトインビーの影響を受けた人物で、80年代のフェビアン社会主義のリーダーの1人でもあった。その後バーネ

ットのよき理解者となり、大学の1室をかりて東ロンドンにオープンした労働者クラスの教育活動をプレゼンテーションを催したり、その後彼らはバーネットに倣ってオックスフォードで労働者教育協会を立ち上げ、ラスキン大学校のメンバーとして労働者教育に生涯専念した。

もう1つ開所のイベントについて記録が残されている。それにはセツルメントの必要について3つに要約⁽⁴²⁾している。1つは労働者クラスの情報入手すること、2つは労働者階級(者)の生活の質を高めるため生活の質を改善すること、3つ目にこの運動の理想としていた“社会的調和”(social harmony)を実現させること。

このとき(開所時)例によって弟に手紙を出している。「この仕事は降参したいほど多忙だろうが反面やりがいのある仕事になるだろう。もちろん牧師として教区の仕事を兼務しながら⁽⁴³⁾だが、大変だと思うが週毎の報告書さらにレジデントたちの活動記録(日報)、それにかねらの暮らしぶりをインタビューする仕事、それに大変なのが朝ごとの集会(小さな礼拝)を準備しなければならないことだ。これはレジデントたちの健康に気を遣い、活動に奮い立たせるような原動力(メッセージ)を伝えてやらなくちゃいけない。その意味でこの朝の集会はもっとも大切な時間だ、その上互いに打ち解け何でも話せる場⁽⁴⁴⁾にしなくちゃならない、全く気の抜けない仕事になるだろう」と。末尾に「ただ一生懸命するだけさ」とも⁽⁴⁵⁾率直な感想をもらしている。

8. 大学セツルメント東ロンドンにオープン

この開所は各方面に多くの波紋を呼ぶことになった。大英国はもちろん時の政府や教会や地方行政にとっても“ビッグバーン”となった。オープンの4日後バーネット自身の所感が『オックスフォードマガジン』にその信念が掲載された。同紙も「この時代にとってもっとも価値ある社会的実験」と評しエールを送っている。見事にこれはバーネットが心に温めてきたもので、モリス(W. Morris)との記念講演会⁽⁴⁶⁾の席上「これは従来までの教会のミッション(伝道活動)ではなく役割を変えた“新しいミッション”をアピールできた」と当面教会を動揺させたがまもなく受け入れられるようになったそのきっかけを作ったのがT・グリーン教授の愛弟子であったアーノルド・トインビーと出あったことは事実である。講演会の様子が新聞記事に取り上げられ「重要な運動がオックスフォードから東ロンドに運ばれていった」⁽⁴⁷⁾と。また『ケンブリッジレビュー』には大学が継続してこのスタートしたばかりのセツルメント事業を支援すべきだとも述べ、今後多くのスペースをさいてトインビーホールをアピールすることと、詳細にセツルメント活動の近況をレポートすることを約束した。

同労働者の1人、アッシビーは長年階級間のいろいろの問題(社会的分節の存在)について疑問をもっていた。それはかれらの人間性を喪失させたと、しかも具体的な解決法を思案していた。「ここ(現地)に来てみよ、そして実際に彼らと接してみよ」というバーネットの処方

の正しかったことを認めた。その確信は1886年の6月はじめてトインビーホールを訪ねた後のことで、自らレジデントとして入植し東ロンドンの事情をつぶさにして分かったことだ。「1つ得ることができた」と、それが「多くの人間味のある人の接触到に解決の方法があることを理解できた」と。続いてノートの後には「衣服などをもって行ってやることも大事だろうが、それ以上に君自身を彼らにプレゼントとして差し出すことではないか」⁽⁴⁸⁾と。またあるレジデントの1人はここ東ロンドンにきて数年トインビーホールのレジデントとして住みこんだことを次のように記して「ステップニーでの生活はボクにとって生涯いちばん楽しかった。それはここには東ロンドンの本当のリアルがあった」と。むしろここに住んでいる人こそ“実際の英国人”だとも指摘したほどだ。「これはボクの“より高いQOL（生活の質）”になったし、充実した時期でもあった」と⁽⁴⁹⁾、⁽⁵⁰⁾正当性を賞賛をもって結んでいる。

がしかし、バーネット自身は感傷にひたっていられなかったようだ。20年近くここに館長として住んでから手紙を例によって弟に書き送っている。多少の不平がみられる「この“**big West London at home**”とあるがまったくアットホームなどかけらもない」とか、また「おまけにここでのイベントは最悪だ」⁽⁵¹⁾とも指摘している。ある労働者のパーティーで話をした時のことだが「1つの政治的な状況のなかののである現実性という要素を持ち込んだだけで、今ではそれが単なるゲームでしかない」と。また多くの労働者クラス人たちは人生の目的などなくただ平易に流されているだけで、唯一あるとすれば“不自然な贅沢”をもっていてそれもポーズでしかない」⁽⁵²⁾のだろうと多少懐疑的な一面をみることができる。

しかしその後、ここに住んで住民たちの悲惨さを考え心開いたアッシュュビがトインビーホールにリコールされたとき、彼は「東ロンドンは“詩的な要素と未知にかけける冒険”⁽⁵³⁾となる地」だと。さらに20年後再びトインビーホールの1部屋をかりてウェストエンド農業協会の会計の任を負ったときその理由に「このロンドンのとくにイーストエンドがボクにとって魅力あるところだった」⁽⁵⁴⁾からと記されている。同様のことはバーネット自身もケンブリッジで初めて会合を持ったとき、ホワイチャペルの様子を“ロマンチックなところ”と機関紙に載せている。「ここへの個人的なボクのたびは大きな関心と、同時に同情心にかき立てられた」と、ただかれらの貧しさはただ悲惨さだけが心をみだし⁽⁵⁵⁾未知への冒険はただ恐れをもって踏み入るようなものだ」とも書きとめている。トインビーホールが開所する少し前の定期刊行物（『オックスフォード・マガジン』）には希望と期待の入り交ざった記事が載った。「セツルメントが唯一イーストエンドを正しく伝えるところだと思う。誰もが信じようとはしないだろうがウェストエンド同様に健康でかつ衛生的な地域」⁽⁵⁶⁾だと。その証拠に1900年の末、あるオックスフォードの学生にトインビー行きを思いとどまらせようと出した母親の手紙がある。その返事に「正直に言うとボクはいま興奮しているんだよ、それはここがひどい病気と悪い“はやり病”が蔓延しているところだと言ひ聞かされてきたが、実際はそんなところじゃない、明日の夕食までには家に帰るから詳しくはそのとき、息子より愛する母親へ」⁽⁵⁷⁾と。

実際初期の創始者たちがもっていた情報は少なく、彼らが抱いた貧しい労働者たちの立ち居振る舞い（考え方や行動の仕方）には一定誤解があったことは否めない。少なくとも初期の指導者たちの中にもまた大学人の中にも「イーストエンドの住人たちは“無知”で楽しみなどない連中」と決め込んでいたし、彼らとの接触など思っても見なかったことだった。ミッションより“**bother scop**”（わずらわしい厄介なもの）⁽⁵⁸⁾とした誤った認識を持っていた。

そこでレジデントたちに幅広い宗教人いや優れて政治的信条をもった人間となることを強く要望した。まず若いレジデントたちに“自己を尊敬する思い”と“労働者たちを単なる”生活必需品の欠くものとか、“パンもいい家も欲しがらないつまらない連中”という決め付けをなくして、彼らの生活の改善に心を砕きかつ情熱をむけさせようとしたバーネットの意図が見える^{(59), (60)}。事実何人かのレジデントたちが少年クラブを立ち上げた。その初期の支援を“プライマリーな接触”にあてこれを通じて互いに信頼感を確立することだと確信し、その“人間を変える”ための理想を実現させるために少年たちに人間性の豊かな者になること、女性に対して一定優しさをもてる少年たちになること、その上もっとも望ましいことは神を愛することのできる人物になることだとしてそのための種々のプログラムが用意された⁽⁶¹⁾。

総じてその担い手たちの役割と使命は、単に物質的な幸福を提供するものではなく、むしろ目標を高くもった“生活の質”を享受できる職業を選ぶことであった。その重要性を教え、清潔な生活それに正義や平和を愛するような人物をと、換言すれば“精錬されたよき市民であること”を高くかけそれを示すところに彼らの使命があった⁽⁶²⁾と、これはその後 PL・ゲル（バーネットの影響をうけてトインビーホールの創設に寄与した人物）などに引き継がれ、ケンブリッジ大学での労働者たちの教育を準備した大きなプロポジションについて述べているが、そうしたバーネットのセツルメントアイディアが徐々に浸透しかつ具体化していった。

9. トインビーホールの若きレジデントたち

この“住の共同体”の特徴は比較的若者（平均 26 歳）で構成された“若もの社会”である。時にその特色は彼らの野心や熱情や熱心いや時には抑えがたい熱狂ぶり、これを“**enthusiasm**”を反映していた。

まず開設当時の様子について述べるが、初代は 1884 年から 1906 年、つまりバーネットがこの初代館長という職を辞するまでの 22 年間、第 2 期、これは第 2 代と第 3 代目の館長時代となるがあわせて 30 年間、まさにトインビーホールの黄金期といえる。トインビーホールの定期刊行物からレジデントたちの名簿から抜き取って表にしたものを参考にすると、総勢 178 名になる。残念ながらその全員の写真は手に入らないが、せめて館の立ち上げ当時（1884 年 12 月）を知る唯一の写真を掲載したものだが、ここにはウィリアム・バルトレット以下 14 名のレジデントたちで、館の立ち上げにバーネットとともに献身した若き熱心党の騎士たちであ

英国における大学セツルメント運動の立役者、チャノン・バーネット（その2）（山口信治）

る。総じて彼らは博愛主義者であり、かつ市民サービスの担い手たちである、ちなみに彼らのついた職をまとめてみると、もっとも多い順から市民サービスの提供者が**25名**と最大となっている。続いて第**2位**が教会関係者（牧師・司祭など）が**21名**、大学の教授として職を得たもの**18名**、**4位**が法律家の**16名**、第**5位**が社会事業家（ボランティアのパートタイムを含めて）**14名**、**6位**に医療（医師）**13名**、**7位**が**8名**のジャーナリスト、**6名**ずつが議員と中学校の教師、**5名**を擁したのが軍隊の兵隊、農業従事者、ビジネスマンとなっている。その他、少数だが経理や会計の職に、技師、地区の行政マンに、芸術活動などなど、実に多彩な職につきながら、他方トインビーホールのレジデントとして奉仕したもののたちである。

もっとも長期間つまり**3代**の館長に仕えたものがヘンリー・ワード（Henry Ward）で**1886**から**1916**年まで実に**30年間**、続いてバーネットの館長時代につかえた**2人**がいる、**1人**は**17年間**苦楽を共にした**T・H ナン（TH. Nunn）**とキルトが**13年間**、**8年**従事者のキングと続く、平均してここでの滞在は**1年**もしくは数年という比較的短い期間のレジデントたちであった。次に多少メンバーシップに変化を見せたのが第**2期**で、その変化の**1つ**は教会関係者の激減したことであろう。一時の**3分の1**にまで減った。そして**1897**年から**1914**年にはわずかに**2人**の牧師だけが赴任してきただけとなった。翌年オックスフォード館が新しく建築されレジデントの数が**30名**⁽⁶³⁾となったが牧界レジデントは皆無⁽⁶⁴⁾。むしろ“第**2**集団”と称される市民サービスの担い手たちが取って代わって支流となる。またこの時期（**1900**年）、第**2**の流れは科学主義への傾斜であろう。大学を卒業しトインビーホールにやってきたレジデントのうち**7, 8人**の者は自然科学を修めた者たちで、のちに大学の教授⁽⁶⁵⁾として、また**100**年から**1914**年では**10人**中**7人**が社会科学の卒業生⁽⁶⁶⁾で、数年間レジデントとしてセツルメントを経験し後に母校や**LSE**（ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス）の教授となった人物がいる。**1903**年にはスクール・オブ・ソシオロジーという学科を立ち上げ、もっぱら貧困研究や解決（法）や理論を手がけ**COS**などの実践活動に関する理論的武装に大きく貢献した。そのほか地方行政とくに基礎教育の基盤の整備、なканずく初等教育と中等教育のそれに委員として参加し大きな役割を果たしたこの功績はおおきい。

このエポッキメイキングは**E・J・ウルウック**（バーネットの助手）らを中心とした組織と運動に、すぐ後にドナルドやデビソンそれにビバーリッジなども参画し、その波及はロンドン大学の前身となるロンドン・スクール・オブ・エコノミーの創立につながった。いわゆる社会科学の起りである。その専攻の中には貧困コースがあって社会調査のテクニックなどがカリキュラムに組まれた。**1913**年から次期のセツルメント館長となる**C・R・アトリー**など、この学科のチューターのもとに教育をうけた者で**1919**年から**1937**年までの間の有力なセツルメントのレジデントとして館に関わった**1人**である。

そこでこの期を境に社会サービスに関係するレジデントとして市民サーバントとして参加する機会が急増した。従来セツルメントの主な関心は教育問題だったが、これを期に貧困問題や

失業問題へと方向をかえた。セツルメントで訓練を受けたあと労働行政庁の専門官として任にあたる者、ちなみにその人数は9人⁽⁶⁷⁾、また1900年から11年間かけて整備した法改正にはRモラードの着手した教育法の草稿はじめ医学教育の改革に、そのほか1905年には失業法の制定に寄与した者、1911年の社会保険法の制定など多様な人材を提供して偉業を成し遂げた。なかでもL・ゲイジなどはドイツに留学して帰国後高齢者や少年たちの健康問題に一石を投じた。さらにL・ジョージなどは健康保険トラストのメンバーとして役割を担った。あらためて言及するまでもなくトインビーホールで訓練をうけた人物を多く見だし排出できたことの実績は他に類のない教育機関であることを物語っている。

だがしかし次にビバーリッジを館長とする時代大きな転換期を迎える。これについては別の稿で述べるが、彼の最大の業績は英国の福祉国家の基礎づくりに寄与した人物であろう。15年後トインビーホールを回顧して「自分にとって生涯の研究となった不就労問題について知識はもとより問題解決の処方などなど、ここでのレジデントとしての経験と訓練の賜物だった」と感謝をこめて述べている。1つ目優雅な生活(くらしぶり)を周囲のものに示すこと⁽⁶⁸⁾、2つ目は人々にモラルや霊的模範となること、3つ目は労働者らのプライドの源⁽⁶⁹⁾を開発することだったが、のちにウルイックやビバーリッジの代では“彼らの生活の不安を取り除く”(予防)に力点がおかれるようになったこと。人生にはっきりとした目的を持たせること⁽⁷⁰⁾と生活の改善(生活水準をたかめること)⁽⁷¹⁾等々を挙げた。これに反してバーネットの路線から逸脱する者も出てきた。2つ3つ紹介しておこう。バリリオール大学の生徒だったステファン・ホブハウスなどは館に自ら宿泊して満足していたが「レジデントらの憩いのオアシスが“貧民に閉ざれている”⁽⁷²⁾」とし批判し開放すべきだと要求した。またランズベリーはレジデントたちが近隣の住人との接触を避けている事実を指摘し「何が必要なのか再考の余地あり」とその改善を要求した。具体的に館の食堂を彼らのために提供すべきだと提案した。それに資金不足を嘆き訴えるものや、M・アーノルドのごときは“セツルメントのマシーナリー”(machinery)⁽⁷³⁾という造語(本来言葉の意味は貧民とか資金、それに施設、平均などを意味したもの)をつくって“終わりの価値”(value as end)と意味づけ共同体の肥大化や施設の巨大化の弊害を指摘した。これに対してバーネットは直ちに「より大きな価値に依拠している」と反論してあらためてセツルメントのもつ価値を再評価させた。つまり「ものや金を供与ではなく、きみ自身(人的資源)をあたえる」⁽⁷⁴⁾というセツルメントの原点に本来の価値を求めるべきだと強く弁明した。

とは言えトインビーホール開設以後社会改良家たちの中に徐々に“サービスの価値”について疑問をもつようになってきた。この動きは1914年ごろのレジデントたちとの関係を“パトロンの関係”にかえて“専門家とクライアント”関係を表す言葉に変わった。これまでのつまり80年代のセツルメントの創始者たちが抱いた関係は封建的な関係を好んだものだし、また同時に貧しい人々を非人格者とみ、あえて“同情”(sympathy)⁽⁷⁵⁾という言葉を用いてきたそ

の反省があらう。

10. バーネットの人柄（*enthusiasm*）と持病に関する考察

そうじて生涯生真面目な人間であった。同時に“生涯ただ一人の親友もなかった”という非社交性は否定できない。反面それとは変わって積極的な面を評価する者たちも少なくない。その1つは身内で、たびたび手紙を交換した弟フランクである。彼は“スピリツ（霊的）と熱心さ”を、また生涯をともにした妻ヘンリエタは夫というより、彼を知る準拠棒として社会主義、トリーイズム、リベラリズムに、またその延長線上に社会の問題観や伝統主義、それに問題の解決にあたる“実証的”な姿勢をあげ高く評価した。これで十分であろう。屋上屋になるがレジデントの評価について、その1人スペンダー（JA. Spender）は、2度トインビーホールを巡ねレジデントを経験した人物で、1886年の3月から8月と1892年1月から8月の印象を“熱心党⁽⁷⁶⁾のバーネット先生”と評した。さらに付け加えて“無制限で計り知れない情熱の持ち主”（*unqualified enthusiasm*⁽⁷⁷⁾）とも書き留めてある。とくにその熱情は青年に対しては特別で、まず彼らの議論に時間をおしまず加わりよく耳を傾けてくれたこと。しかも議論や話し合いを決してうるさがることをしなかったし、途中で投げ出すこともしなかったこと。さらに彼の知能面について“彼が知り得た知識のすべてを投げ打って係わってくれる姿勢”に、しかもその的確な判断、とくに社会問題に対する洞察など卓越した能力を持ち合わせていた⁽⁷⁸⁾点を記録にとどめている。その上、その行動力⁽⁷⁹⁾のすばらしさを賞賛し、何かアイディアが浮かぶと書き留めておき、時間をかけてじっくり考えそして時に練りなおし、その上でリフレッシュされた構想を実行に移すという行動のパターン⁽⁸⁰⁾などリーダーの模範であったこと、決して短絡的でなく緻密でかつ用意周到型なところに彼の持ち味があったと評価⁽⁸¹⁾している。そうしてもう1つ決して高飛車なところがない“腰の低さ”⁽⁸²⁾をあげ彼のもつ1つの特徴だと評した。確かに“*perplexity*”（大変な臆病者＝困り果てる）⁽⁸³⁾の一面を持ち合わせていたが、それは当時の社会問題に対する“*shrewd*”つまり鋭い観察眼をもっていたことを表現したものといえようし、ときに彼らは“*seer*”（予見者⁽⁸⁴⁾）と呼んだが、チャールズ・トリベリアン（Charles Trevilyan）の場合、バーネットにはじめて貧しい労働者の戸口を叩かせた人物だが、彼の印象を「彼ほど多くの政治や社会機関と顔見知りはいなかった」と。その人脈とその利用に卓越した人物であることは間違いなかろうと思う。スペンダー（Harold Spender）によると、彼を“人をひきつける磁石”⁽⁸⁵⁾と評しその人間リーダーぶりを高く評価した。その3同労者の場合、その人柄とアイディアについて、“*ideal warden*”と評した同僚J・A・R・ピモレット（J. A. R. Pimolott）は“半聖人”と、“半政治家”“単純な人”のニックネームで呼んだのは先に述べたが、初代館長時代の館長ぶりを次のように評価している。「教育アイディアはもちろんだが、そのプログラムにレクリエーションやアミューズメントを

導入したこと、それに資金集めに卓越した能力の持ち主」⁽⁸⁶⁾だったと絶賛している。その上その“優れたアイディアと強力な人をひきつける”魔法（リーダーぶり）や生涯をかけて貧民の“civic life”の改善に義務感をもった人物などは割引なしに評価できると。また病身ゆえにひどい“引っ込み思案”で人をさけるところがあったが、その反面密室での神との交わり（いのちの生活）を欠かさなかったこと。いったんこうと決めたことは手抜きをせずひたすら一生懸命に実行した。1つのエピソードが残っている。何か大きな問題にぶつかると必ずメモをとるくせがある。死後、メモの多数が未整理のまま残されているが、それを何度も反芻し繰り返し練り直しては策を見つけようとする努力を手抜きしなかったと。総じてそのマイナスも人間関係にある誤解を免れなかったことも事実であるが、文献で知る限り人物、思想、行動力ともバイパーラー（両極性）とバランスを保った人物だと一定評価できる。以上何よりも増して彼の秘密を知る手がかりは敬虔なキリスト者（信仰の人）であったことこれは否めない。祈りの人であったこと。肉体的にも精神的にも、また社会的にも霊的にも弱さがあったからこそ祈りにより一層神へ帰依し“弱さを誇った”のだろうと推測できる。あの力動と強さは弱さが故のものであった。

〔注〕 主な手がかり

人物、 $\left(\begin{array}{l} \text{F. G. B.} = \text{Francis Gilmore Barnett} \\ \text{S. A. B.} = \text{Samuel Augustus Barnett} \\ \text{W. H. B.} = \text{William Henry Beveridge} \end{array} \right)$

- (1) *hipochondria*, この語は 1869 年米国のバート医師 (Beat G. M) の造語で、その後西ヨーロッパに大流行するであろうと警告された気の病気で、めまいなどを主訴とする神経の疲れを表した病名。
- (2) 住の社会組織 ; Pichit, J. A. R. Toynbee Hall, Lonndon, 1935", a coloney of members of the Upper class" p. 1.
- (3) picht, W. Toynbee Hall and the English Settlement Movement, London, 1914, p. 30. "a living organism".
- (4) 熱病多発地 ; Seaman. L. C. B. 著, 社本・三星訳「ヴィクトリアの時代のロンドン」創元社, 1987, p. 38.
- (5) スラム化した東ロンドン ; C・J・ブーツ (Booth (1840-1916) の「貧困調査」によると Shoreditch, Bethnal Grenn, Whitechapple, ST. George in the East, Stepney, Mile End, Poplar を東ロンドンもしくはイストエンド (East End)
- (6) 病院 ; 「ホワイトチャペル通りに 1 つの病院が建てられた。場所はあまりに人里はなれた片田舎」(1752-59 年ごろの建築物)
- (7) 難民 ; Seamen, 前掲書, p. 7.
- (8)(9) 1901 年の人口センサス ; Report of the Royal Commission on the Aliens Question 4.
- (10) H. S, Lewis and C, Rusell The Jew in London : A Study of Racial Character 1900, p. 37.
- (11) 友情 ; Picht, 前掲書, p. 93. "friendship" not money but yourselves.
- (12) Spender, Fire of Life, p. 88.
- (13) S. A. B to F. G. B, nid, 1892.

- (14) S. A. Barnett, "Labour and Culture" "Toward Social Reform", pp. 215-216.
- (15) Ashbee, "Memoirs" vol 1. "The Guild Idea 1884-1902", pp. 7-11.
- (16) Interviews with Sir Harold Howitt, 5, May, 1967.
- (17) S. A. Barnett "Settlement of University Men in Great Towns".
- (18) W. H. B to Annett Bereridge, 16, Jan., 1900.
- (19) Oxford Magazine 15, Oct., 1884.
- (20) "mass" S. A. Barnett, Settlement, p. 9.
- (21) EP. Thompson, William Morris; Romantic to Revolutionary, London. 1955, p. 390.
- (22) 上部機関ヘッド, Picht, 前掲書, p. 30.
- (23) トインビーホール評議会 (Toynbee Council)
- (24) メンバーシップ費用
- (25) 226 団体, 関連協会 (延べ人員 152 人)
- (26) レジデント (1884-1911)
- (27) 罪の意識; "consciousness of sin" (B. Webb "Apprenticeship", pp. 204-208. バーネットは "社会的酵素 (social enzyme の素)" と呼んだ。
- (28) Rev. Brook Lambert, "Contemporary Reviews", 1884, 9 月号。
- (29) 教育の導入 (Henry Scott Holland, A Bundle of Memories, London. 1915, p. 91.)
- (30) Pimolett, 前掲書, p. 281.
- (31) Social Idealism, Picht, 前掲書, p. 9. カーライルやラスキンの知的運動。
- (32) H. O. Barnett, Barnett, I, p. 68.
- (33) Brook Lambert, "Jacobs Answer to Esau's Cry, Contemporary Review, Sep., 1884, p. 377.
- (34) Ibid.
- (35) Picht, 前掲書, p. 7.
- (36) 3 つの必要; B. Webb, Apprenticeship, pp. 204-08.
- (37) "東ロンドンの黙示" SA, Barnett, "University Settlements" University and Social Settlements, ed, Will Reason, London, 1898, p. 12.
- (38) Pimolett, 前掲書, p. 7.
- (39) Oxford Magazine, 27, Feb., 1884, p. 110.
- (40) SA, Barnett, Settlements of Upper Man in Great Towns, "Summary of Speech" (Cambridge Review.) 7 May 1884. p. 307.
- (41) Oxford Magazine, 7, March, 1892.
- (42) トインビーホールの 3 つの機能;
- (43) S. A. B to F. B. G, 1, March, 1884.
- (44) S. A. B to F. G. F, 24, Jan., 1885.
- (45) Alfred Miller, Arnold Toynbee, A Reminiscence, London, 1901, p. 35.
- (46) Oxford Magazine, 21, Nov., 1883.
- (47) Oxford Magazine, 9, Dec., 1885.
- (48) Ashbee, "Journal", 28, June, 1886.
- (49) Louis, Picture and Politics, p. 74.
- (50) Spender, Fire of Life, p. 58.
- (51) SA. B. to F. G. B, 1892.
- (52) S, B, A "Labour and Culture", pp. 215-16.
- (53) Ashbee, "Memory" Vol, 1. "The Guild Idea" 1884-1902.
- (54) Interview with Sir Harold Howitt, 5, May, 1967.

- (55) S. A. B “Settlement of Upper man in Great Town”, 7, May, 1884, p. 307.
- (56) W, H, B to Annell Beveridge, 16, Jan., 1900.
- (57) B to Annett Berverrigde, 16, Jan. 1900.
- (58) “bother scop”.
- (59)(60) S. A. B, Settlement” p. 9.
- (61) S. A. B, Settlement, p. 7.
- (62) op, cit, p. 8.
- (63) Arther Foley Winnington-Ingram, Fifty Years Work in London, 1884–1939, 1940, p. 6.
- (64) Anthony C, Deane. the Falling of in the Quantity of the Clergy, Vol. XLY (January-June 1899) p.1023-30.
- (65) William Macbride Childs, EJ. Urwick, pp. 105–106.
- (66) R. H. Tawang, N. B, Deade. H. C, Clay, A, Moriis, H. P, Henderson, G. F, Share, John ST George Heath.
- (67) Blakiston, Beverigde, Hawking, Nicholson, Dorking, Bligh, Enfreld, Dale, J ST Great Heath.
- (68) S. A. Barnett, Settlement, p. 8.
- (69) S. A. B to F. G. B. C, 1, March, 1884.
- (70) S. A. B to W. H. B, 13, Feb., 1904.
- (71) Memoranding 10, T. H. Reserchs, 31, May, 1913.
- (72) Stephan Hobhouse, Forty Years and on Epilogue, An Autobiograpy, 1881–1951, p. 133.
- (73) machinery.
- (74) S. A. B to F. G. B, 22, June, 1889.
- (75) Sympathey ;
- (76) CV, Butler, Barnett House 1914–1964, Oxford, 1964.
- (77) S. A. B to F. G. B, 3, May, 1886.
- (78) S. A. B to F. G. B, 16, Nov., 1902.
- (79) S. A. B to F. G. B, 18, Nov., 1905.
- (80) Cambridge Review. 18, Feb., 1885.
- (81) Laurie, Pictures and Politics, p. 73.
- (82) Llewellyne Smith. “Influx” Labour and Life, 1, p. 521.
- (83) PP 1903 9, Report the Royal Commition on the Aliens Question, p. 4.
- (84) op, cit. p. 14.
- (85) op, cit, pp. 22–23.
- (86) Cambridge Review, 18, Feb., 1885, p. 214.

(やまぐち しんじ 現代社会学科)
2004 年 4 月 23 日受理